

舞台美術家・土屋茂昭氏 特別インタビュー



SET が創り上げた“三位一体”のバランス。

土屋さん（談）：日本初演『キャッツ』が36年前だから…。ミュージカルがそんなに世の中で認められていなかった40年前、「ミュージカル」と「アクション」と「コメディ」を全部やろうとしたのがSET。そりゃ先駆的でしたよ。スターは三宅裕司と山崎大輔。定員100名のところへ200人を詰め込んだ会場で、血を流しそうな臨場感あるアクションをやるんだけど、そこを貫いているのはコメディ的なドラマ、これが実に絶妙でした。噂を聞きつけて僕の四季の仲間や古田新太さんなんかも観にきていたようです。当時の印象は、お笑いの“間”を大切に

した三宅さんと新劇系のメンバー、他にも色んなところから集まってくる人たちの“意識の断層”が面白いになって。あと感心したのはね、ジャズダンスのレッスンを立ち上げ当初からやっていたこと。オリジナル作品をつくりながらも勢いによって我流でやるんじゃなく、全員が基礎的なレッスンを積んでいました。このおかげで、SETはどの作品も一貫して「ちゃんとしたダンサーがコメディをやる」「みんなが全部やる」という珍しいスタイルを確立できたんだと思う。

新旧ともにハイスキル！ 個性派揃いの劇団員たち。

土屋さん（談）：SETとは最初の本公演からご一緒させていただいているのですが、あの頃は池袋のシアターグリーンがメインでね。ちょうど建設中だったサンシャインシティのビルは当時アジアで一番高いビルになると話題で、劇場もある。みんなで舞台道具を作りながら「いつかあそこでやろう」と。だから今は本公演をサンシャイン劇場で上演していると思うと感慨深いですよ。

SETの好きなところは、芝居づくりに真面目なところ。アドリブはほぼなくて、稽古場で練ったものを観客に見せる姿勢はずっと同じ。ちゃんとダンスレッスンしてるし、歌唱力も高いよね。今年で創立40周年ですが、創立メンバーが座長の三宅裕司を含めて9人、さらに他にも入団30年を超える劇団員が6人いて、みんながSETを愛している。そうそう『土九六（どくろ）村へようこそ』（2016年）という作品で、ベテラン勢がボケて舞台を通り過ぎるだけのシーンは最高だったなあ。（笑）



10月22日（火・祝）終演後に、土屋さん&舞台スタッフによるスペシャル企画を開催！

土屋さん（談）：舞台美術というのは、台本が描く「空間・時間・人間」という3つの“間”を埋めて、ドラマに寄り添う仕事。広い意味では照明も衣裳も舞台美術です。なので、バックステージイベントの日には、照明や音響のチームみんなに手伝ってもらいながら、盛りだくさんな体験をしていただけるよう計画中です。きっと面白いので、記事にするなら「土屋茂昭のバックステージツアーはすごいらしい」って書いておいてね！（笑）//

取材・文 平野美奈 Theatre at Dawn / 撮影 柳川忠之 EGACOH LLC

【土屋茂昭氏プロフィール】

日本舞台美術家協会副理事長。大阪芸術大学客員教授。SET 創立公演から全ての本公演の舞台美術を手がける。1972年 劇団四季舞台美術部 1983年 ミュージカル『CATS』の美術総合デザインを担う。以後、劇団四季製作のほぼ全作品の舞台美術や長野冬季オリンピック開閉会式美術スーパーバイザーなどを手掛ける。2000年独立してフリー。ストレートプレイ・ミュージカル・オペラ等の舞台美術家として活動。主な作品に『鹿鳴館』（四季自由劇場）『EVITA』『李香蘭』『ウエストサイド物語』（四季劇場他）地球ゴージャス『ゼロトピア』（ACT シアター）『ぼくに炎の戦車を』（ACT シアター/韓国国立劇場）など多数。